「日々の理科」（第 452 号） 2015（H27),-9,28

「オシロイバナの研究（１）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

５年生の教科書では、花の構造や花粉の観察の材料として、アサガオを扱っている。栽培が容易であることに加え、ちょうど１学期の終わりから２学期の始めにかけて、花期を迎えることも好都合なのだ。確かにアサガオは花弁（花びら）も大きく、子どもが「解剖」して観察するには、誠に都合がいい。しかし、アサガオの花はいくらでも使える・・・というわけにはいかない。私は、アサガオのかわりにオシロイバナを使っている。

「夜間に開花するオシロイバナ」　門前仲町駅付近

オシロイバナの花は、夜間に開花する。夜に咲く花は、花弁の基部が細長いものが多い。カラスウリの花も同じだ。蛾の吸蜜による、花粉の運搬を「狙った」形状なのだろう。この「花の長さ」が、観察を面白くする。

オシロイバナは珍しい植物ではない。街中の道端の植え込みにも、普通に見かける。誰が植えた・・・というわけでもなく、一度生えると、大量の種子を落とすので、毎年そこに生えるのだ。本校の保健室前の花壇にも、超巨大なオシロイバナの株があり、２学期の始めに、毎日大量の花をつけるので、学習材に困ったことはない。

「保健室前のオシロイバナ」　養護教諭に聞いたら、「私が種まいたわけじゃなくて、毎年勝手に生えてくるの、ど～しよ～・・・」と言っていた。いや、理科的には、大変有難い存在である。

花は、ざっと 1000 輪は咲いているだろう。小さなつぼみ、大きなつぼみ、咲いている花、しぼんだ花、種子ができかけているもの、完全に熟した種子・・・すべての成長過程が一度に手に入る。

量的には、４クラスが、一人一枝、一斉に採っても、まったく影響がない。まずは、はさみを持って採集に行く前に、枝の選び方を指導した。一つの枝に、さまざまな成長過程の花や種子がついているもの・・・これを選んで研究に使うこと・・・という指示である。上の写真は、なかなか良い選び方をしている。これなら、思い切りオシロイバナの研究ができるわけだ。